

MCQ-30(Wells & Cartwright-Hatton, 2004)の 他の質問紙法との関連による妥当性の検討

田 崎 権 一

概 要

前回(田崎, 2015)は, メタ認知質問紙短縮版 MCQ-30(Wells & Cartwright-Hatton, 2004)の日本語訳版(田崎・諫早, 2007; 田崎, 2013)について、尺度としての信頼性を、再検査法と項目分析等により検討し、信頼性を確認する結果を報告した。今回は、この MCQ-30 の尺度としての妥当性を、他の質問紙の性格検査との相関の程度により検討した。すなわち矢田部・ギルフォード性格検査(Y-G 性格検査)や BDI(Beck Depression Inventory)との相関係数を調べた。その結果、Y-G 性格検査や BDI との有意な相関から、E 型(不安定不適応消極型)と思病的内向の構成概念が確認された。ただし、今後もこの種の妥当性の検討を継続すべきとした。

問題と目的

メタ認知は、いろいろな認知科学の領域で用いられる用語である。認知心理学だけでなく、ヒューマンエラー防止が必須の領域でも用いられる。たとえば、大山・丸山(2001)は、医療事故、核燃料臨界事故、交通事故、自己モニタリング、自然界、産業界、外界と内界、を挙げている。また、産業界におけるヒューマンエラー防止について、正田(2001)は具体的で実用的方法を紹介している。本論文で扱うのは、自己モニタリング(認知心理学)の領域や、外界と内界(臨床心理学)の領域と関連している。

筆者(田崎, 2013)は、Cartwright-Hatton & Wells(1997)によるメタ認知質問紙 MCQ(metacognitions questionnaire)(以下、MCQ)の成立の背景と、Wells & Cartwright-Hatton(2004)によるその短縮版 MCQ-30 の意義を述べた。メタ認知質問紙 MCQ は、メタ認知上の信念(beliefs)を選択する際に現れる個人差を測定するものである。MCQ は、元々、Cartwright-Hatton & Wells(1997)が、精神病理学に関連した詳細な 65 質問項目を作成したものである。その後、彼ら(Wells & Cartwright-Hatton, 2004)は、その 30 質問項目からな

る短縮版(MCQ-30)を作成した。その際、共通して、「認知的自信の欠如」「積極的信念」「認知的自己意識」「制御不能と危険」「思考制御欲求」の5因子を確認している。その論文を手掛かりに、筆者は日本では初めてのMCQ-30日本語訳(田崎・諫早, 2007)を作成し、日本語圏内で調査し、日本教育心理学会総会にて発表した。そこでは、Wells & Cartwright-Hatton (2004)とほぼ同様の因子を見出している(詳しくは、田崎, 2013)。このMCQ-30日本語版について、再検査法や項目分析など信頼性の確認を実施したのが田崎(2015)である。MCQ-30日本語版の完成には、その後に残された課題として、尺度の妥当性の問題があった。

ところで、こういった尺度作成において踏むべきプロセスが示されている。南風原(2001)は「質問紙尺度の作成の流れ」を挙げている。その中で指摘されているのは、「1. 測定目的の明確化」→「2. 項目の作成と質問紙の編集」→「3. 予備調査とその結果の分析」→「4. 項目の修正と質問紙の再編集」のプロセスである。これらのうち、筆者が推測するに、本論文のような英文原著からの翻訳版の妥当性を検討する場合、「3」と「4」が中心になると考えられる。「3」に含まれるのは、「(a) 対象者とその数は?」、「(b) 項目ごとの回答の分析は?」、「(c) 尺度得点の分布は?」、「(d) 尺度の内的整合性は?」、「(e) 尺度の信頼性は?」、「(f) 尺度の妥当性は?」、「(g) 尺度の表面的妥当性は?」の7つの観点である。これらのうち(a)～(e)は、前回(田崎, 2015)に報告したので、残る(f)と(g)の妥当性の問題が未解決のままであり、それを調べる必要がある。

妥当性について、村上(1999)は次のように記している。多少長い文章だが引用する。妥当性とは、以前は「テストが測定を目指したものを実際に測定している程度」とされていたが、今日では「テストの得点の解釈とそれに基づく推論の正当性(の程度)」と定義されるようになった。「すなわち、テストで測定がめざされる『不安傾向』『言語能力』といった特性は、理論的な構成概念であり、意味のある測定を可能にするためには、それらの特性について、他の特性との関連や、異なる属性をもつ...群間の得点の差異等に関する結果を予測できるような理論がまずもって存在しなければならない。データがその予測と矛盾しなければ、テスト得点の解釈は一応維持される。結果が予測と反するなら、測定の妥当性に疑いが生ずるが、場合によっては、特性に関する理論の方を修正することもありうる。理論から予測される命題は限りなくあるから、妥当性を評価するための単一の指標はありえず、妥当性の検討は事実上終わりのないプロセスとなる。これが“構成概念妥当性”の考え方であり、今日では、これが関連項目に列挙されたさまざまな他の妥当性の概念をすべてカバーするものと考えられている。市販テスト等の名称

はこうした検討なしにつけられていることがあるから注意が必要である。いずれにせよ、信頼性とは異なり、妥当性はテストの得点自体の性質ではなく、測定との関係で評価が変わりうる。つまり、テストを使用する文脈を無視してテスト自体の妥当性を云々することは無意味である」としている。

上掲の構成概念について、南風原(2001)は、それを観測変数や測度のデータ化するには、構成概念を踏まえた質問項目になっていなければならない。「測定は概念の世界とデータの世界の橋渡しをするものである。」「構成概念間の関係が、データの世界で、つまり観測変数間の関係として確認できるかどうかという『つき合わせ』をする」。南風原(2001)は、測定の妥当性を評価する作業を妥当性の検証(validation)といている。そのための方法として、

- (1) 同一の、あるいは類似した構成概念を測っている他の変数と高い相関があること(収束性妥当性 convergent validity)
- (2) 別の構成概念の測定値とは低い相関となっているか(弁別性妥当性 discriminant validity)

これら2つの条件が、どの程度、満たされているかで、測定の妥当性が評価されるとしている。

また、村井(2012)は、「心理尺度の信頼性は、妥当性の必要条件です。信頼性が低ければ、妥当性も低くなります」(p.64)。「妥当性は測定のために依存する...信頼性とは測定の精度、妥当性とは測定の有意味性」(p.65)であり、「『信頼性は尺度内部だけで決まる性質であるが、妥当性は尺度の外部にある何かとの関係抜きには定義できない』(村上, 2003)」(p.67)としている。たとえば他の尺度との相関係数を妥当性係数として用いるのである。「『検査は多面的な目的で使われるが、それぞれ目的に関する妥当性は、経験的に確立されなければならない』(Lilienfeld, 2007) ...妥当性は、測定対象となる概念との関係性抜きには考えられないことに加え、どのような場での測定なのか、という場との関係性抜きにも考えられない、さらには数値のみでは保証できない面がある...妥当性については、他の尺度との相関という形で数値化できはするものの、そこで相手にしている問題が『測りたいものを測っているか』という雲をつかむような作業であるがゆえに検証が困難」(p.67-68)としている。「単に他の尺度との関連を見るだけでなく、何らかの実験状況を構成し検討するとか、あるいは日記法を用いて研究参加者の日常生活を検討するとか、他の複数の側面から妥当性があることの証拠集めをしなければならない...それは手間のかかる作業で、しかも、行動指標との関係を検討したところで妥当性が完璧に検証されたことになりません。つまり、妥当性の検証は終わりのない戦いなのですが、とりわけ妥当性の検証には手間

暇を惜しまない姿勢こそが、尺度を作成する際に最重要視されるべき点です」(p.70)。妥当性にはいくつかのタイプがあるという考え方が現在もあり、「妥当性と言いますと、多くの心理学の書籍では、基準関連妥当性・構成概念妥当性・内容的妥当性の説明があります。これは妥当性の旧来の考え方で、妥当性の三位一体観と称されます...近年は、そうした3分類ではなく、概念構成妥当性にすべての妥当性を収斂させる考えが主流です」(村井, 2012)。

本論文では、MCQ-30の妥当性について、他の質問紙法との相互の相関係数を調べることでMCQ-30の妥当性を検討する。そのための他の質問紙法の性格検査として、最も一般的なY-G性格検査をとりあげる。またMCQ-30の測定がメタ認知、抑うつ、不安傾向を測定する質問紙法であるので、MCQ-30と抑うつ尺度との相関を調べる目的で、Beck Depression Inventory (BDI)を取りあげる。Cartwright-Hatton & Wells (1997)は、不安を測定するSTAI(状態・特性不安尺度)との関連について統計的に有意な相関があったことを報告している。しかし、本論文のための調査では、諸般の事情によりSTAIのデータはとらなかった。STAIについては、別の機会としたい。

一般的な性格検査の質問紙としてY-G性格検査を用いる理由は、MCQ-30が測定している内容についてよりよく理解するために、質問紙法として最も周知かつ熟知されているY-G性格検査のどの特性因子がどのMCQ-30尺度因子と相関が高いのかを明らかにすることにより、Y-G性格検査を基準にして、このMCQ-30の因子の位置付けができるものと思われるからである。すでに田崎・諫早(2007)において、MCQ-30尺度と、Y-G性格検査のうちの「思考的外向:Thinking extraversion: T尺度」(以下、「思考的外向」と「のんきさ:Rhathymia: R尺度」(以下、「のんきさ」)の因子尺度だけを含めた因子分析の結果、「思考的外向」とはMCQ-30の「認知的自己意識」との負荷量(-.59)が大きかったが、「のんきさ」は「思考放棄(制御しなければ罰せられる思考がある)」との負荷量(.44)が見られた。さらに別に校種が同一ながら調査対象者を改めて収集した、田崎(2012)の結果では、「思考的外向」とでだけ、MCQ-30の(「認知的自信の欠如」を除く)4因子「積極的信念」「認知的自己意識」「制御不能と危険」「思考制御欲求」と有意な負の相関がみられた。

しかし、MCQ-30の妥当性の検討のためには、やはりY-G性格検査のすべての因子との相関係数を確認する必要があると思われる。また、調査参加者や対象校種が変わるとどうなるのか、「のんきさ」との関連はどうかを、これまでの結果と比較して調べる必要がある。

他方、MCQ (Cartwright-Hatton & Wells, 1997)は、質問紙作成の最初の段階で原作者は不安症外来患者との面接で得たやり取りから書き起こし、その

データの内容から質問項目を作成している。今回は、BDI による抑うつとの関連で MCQ-30 の妥当性を調べる。不安と抑うつとの関係について、Wells & Matthews (1994: 箱田裕司・丹野義彦・津田 彰 訳, 2002) は、「感情ユニットが感情と関係した概念と出来事を活性化化する傾向を示した。それゆえ、人がある感情状態にある時、その人はその感情と一致した刺激を知覚し注意するようにプライムされる。…不安障害とうつ病は特定の機能不全的スキーマの活性化の結果として生じ、いったん活性化されると、それらのスキーマは信念に一致する情報へ注意を向けさせるのである」(同, p.67)。「うつ病患者はまた対照群被験者と不安症被験者の両方と比べても、不定的な抑うつ関連単語を自分に当てはまるとすることがより多かった」(同, p.91) ことを引用している。同じく、Wells & Matthews (1994: 箱田裕司他 訳, 2002) は、不安と抑うつとの異なる側面が混同されることについて、不安と抑うつとの測度について、「抑うつスケールが、抑うつを測定するのとほとんど同様に、不安症も測定している。逆もまた当てはまる」として BDI での統計結果を示している。「広く使用されている STAI の状態不安スケール…が、不安な気分と同様に抑うつ気分も測定している」(同, p.98) とも述べている。

以上から、抑うつに限定した内容の妥当性を検討するために BDI を用いることにした。BDI は、「うつ病自己評価尺度」といわれて 21 個の質問項目それぞれについて 4 段階で評価する形式となっている。…この質問票は不安、身体症状といったものよりも自覚症状に重きが置かれている。Beck 自身の分類では 0～13 をほぼ正常、14～24 を軽症から中等症、25 点以上を重症のうつ病としている。うつ病期に 26.5 ± 6.67 、寛解前期に 15.3 ± 3.36 、寛解期に 4.2 ± 3.52 という追試報告がなされている」(上里, 2001, p.314)。また、うつ病のアセスメントで代表的なものとして BDI を紹介し、もっともよく使われており、妥当性も高いとしている。(同, p.557)。

以上の理由から、本論文では MCQ-30 の妥当性を検討するために、同時に実施した Y-G 性格検査と BDI との関連を調べる。

方 法

質問紙：田崎 (2015, p.22) で説明したように、Copenhagen 大学の海野氏 (海野, personal communication, 2014, August 8) の指摘を踏まえて質問項目 Q8 の一部でワーディング (wording: 村井, 2012, p.72) の変更を行った。すなわち、メタ認知質問紙短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の日本語訳 (田崎・諫早, 2007; 田崎, 2012, 2013, 2015) のうち、Q8 の一部を「Q8. 深く考えることはストレス解消に役立つ」から「Q8. 深く考えることでうまく取り組むことができる」へと改めた (下線部を修正し) ものをを用いた。他は、

これまで使用してきた質問紙と同一である。尚、「表1」中の質問項目の順番（項目番号）は、実際使用する際の質問紙の中では異なる。同一尺度内の質問項目が連続しないように意図的にランダムにしたからである。

MCQ-30は、「認知的自信の欠如」「積極的信念」「認知的自己意識」「制御不能と危険」「思考制御欲求」の5つ因子で、各6質問項目、計30問からなる質問紙を使用した（詳しくは「表1」の「質問項目」欄参照）。調査対象者には、これら30の質問項目について、自分自身に関して、4-point-scale（「4:非常に当てはまる」-「3:やや当てはまる」-「2:少しだけ当てはまる」-「1:当てはまらない」）で評定させた。

配布封筒：MCQ-30、Y-G性格検査、BDIの、各質問紙の最上行の上方余白に同一の通し番号を打って、同じ通し番号の封筒表面に3種類の質問紙を封入した。これら封筒を各調査参加者にランダムに配布した（尚、他に投映法の性格検査も同封していたが、今回は集計しなかった）。

調査対象者：九州地方中央に所在する4年制公立大学学生135名に質問紙等が入った封筒を配布した。記入時に、記入漏れがないように、口頭で注意を促した。集計時に記入漏れが1項目でもあればその人の分はすべて無効とした。調査参加辞退者4名、記入漏れ5名を除いて、最終的に分析に用いた有効回答は126名であった（有効回収率93%）。有効回答者の内訳は男子37名、女子89名、平均年齢は19歳03ヶ月であった。この有効回収率は、前回実施時の72%（今回は再テスト法で期間を隔てた2回実施で有効回収率は低い）と比較するとかなり高い。

尚、実施に先立って、「この調査用紙回収後の結果は統計的に処理するので調査参加者個人に迷惑はかけないこと」、「調査協力者は自分の自由意志でいつでもどの時点でも調査を辞退できること」、「辞退しても履修授業の成績には関係しないこと」の3点を口頭と、同時に、Power Pointにより教室全面のスクリーン上に映し出して伝えた。

調査時期：2015年6月中旬に集団で実施。

調査用紙の配布と回収：調査参加者には、質問紙が入った封筒ごとランダムに配布した。また記入前後で他者の分と混同させないように注意を促した。質問紙等は、その日の授業の開始時に、配布・記入させ、記入終了後、MCQ-30質問紙等を封筒で回収した。配布と回収はすべてその日の授業内で完了した。

質問紙記入に際しては、最初に、Y-G性格検査を集団で実施した。筆者が問題を読み上げ一斉に実施した。他のMCQ-30とBDIは協力者各自のペースに任せた。すべての性格検査を含めてすべてを終了するまで約60分を要した。尚、Y-G性格検査結果の開示希望者は封筒記載の通し番号を○で囲み、

自分の封筒の通し番号を書き控えておくように伝えた。

結果と考察

データの統計処理（因子分析と相関係数など）は、おもに SPSS（version

表 1. MCQ-30の各項目の評定平均値と標準偏差 ($n = 126$) (2015年6月実施)

№	尺度と質問項目	評定平均値	標準偏差
認知的自信の欠如		12.70	4.25
1	自分の記憶を信用していない	1.91	0.91
2	記憶力がよくない	2.10	1.00
3	自分のしたことの記憶に自信がない	1.90	1.01
4	場所の記憶に自信がない	2.18	1.10
5	言葉や名前についての記憶に自信がない	2.27	1.08
6	時々記憶違いで失敗することがある	2.29	0.91
心配事への積極的信念		16.64	4.43
7	決心する前に深く考えることができる	3.04	0.89
8	深く考えることでうまく取り組むことができる	2.52	0.97
9	深く考えることで仕事を円滑に行うことができる	2.56	1.01
10	深く考えることで問題解決に役立つ	2.94	0.91
11	頭の中をきちんとしておくには深く考える必要がある	2.74	0.90
12	深く考えることで問題を事前に避けるのに役立つ	2.88	0.96
認知的自己意識(メタ認知過程)		14.66	5.05
13	常に自分の考えていることを意識している	2.78	1.00
14	自分の心の動きに深く注意を払っている	2.48	1.06
15	自分の思考についてよく考えている	2.69	1.08
16	常に自分の思考について審査する	2.40	1.04
17	自分の思考を監視している	1.99	0.98
18	問題を考えているとき自分の思考傾向を意識している	2.38	1.05
思考制御不能と危険への消極的信念		14.40	12.70
19	一度気になり始めると頭から離れなくなる	3.17	0.89
20	心配し始めると止まらなくなる	2.90	1.05
21	心配事で病気になるかもしれない	1.59	0.87
22	心配事があると無視できない	2.93	0.96
23	心配事で気が狂うかもしれない	1.48	0.80
24	心配事は脅威となる	2.35	1.02
迷信・罰・責任など思考一般への制御欲求の消極的信念		13.00	3.96
25	思考を制御できなければ作業ができない	2.36	1.09
26	自分の思考を制御できないのは弱さの現れだ	2.40	1.19
27	いかなるときも思考を制御しておくべきだ	2.18	1.04
28	思考の中には考えてはいけないものがある	2.22	1.05
29	心配事を制御できないのは自分の責任である	2.31	1.03
30	制御しなければ罰せられる思考がある	1.58	0.89

22) を使用した。MCQ-30 について、「認知的自信の欠如」「積極的信念」「認知的自己意識」「制御不能と危険」「思考制御欲求」の因子が見られるか、因子分析(抽出法は最尤法、プロマック法回転後、以下同様)の結果、7つの因子を見出した。第1因子は「認知的自己意識」(因子負荷量0.4以上は「表1」中、該当の6質問項目)、第2因子は「積極的信念」(同じく、Q7が0.375以外で「表1」中、該当5質問項目)、第3因子は「認知的自信の欠如」(同じく、該当6質問項目)、第4因子「思考制御欲求」(同じく、Q25が0.306とQ28が0.358以外では、「表1」中、該当4質問項目とQ24)、第5因子は「制御不能と危険(一部)」(同じく、「表1」中のうちQ21とQ23の2質問項目)、第6因子は「制御不能と危険(他の一部)」(同じく、Q19, 20, 22の該当3質問項目。Q24は0.188)、第7因子は「記憶への不信」(同じく、Q1の1項目)であった。

第5因子を構成する質問項目は2項目と、第6因子の3項目を一緒にまとめると、オリジナルのMCQ-30(Wells & Cartwright-Hatton(2004)における「制御不能と危険」とほぼ、同一の質問項目の構成となる。この傾向は、田崎・諫早(2007)でも見られた傾向である。第7因子を構成する質問項目Q1は同時に第3因子にも含まれており第7因子を削除した。その結果、従来の結果とほぼ同様に、「認知的自信の欠如」、「積極的信念」、「認知的自己意識」、「制御不能と危険」、「思考制御欲求」の5因子が得られた。また、前回まで報告したデータの調査対象校種や調査対象者とは異なるにも関わらず、同様の因子を見出せた。この結果はMCQ-30の信頼性の証の一つと考えることができる。

MCQ-30尺度はメタ認知上の信念(beliefs)を選択する際に現れる個人差を測定するものとされている。

以下では、MCQ-30のそれぞれの因子の意味(田崎, 20013)を確認し、Y-G性格検査、BDIとの相関(「表2」参照)を手掛かりに、MCQ-30の各因子の基準関連妥当性(criterion-related validity)のうちの併存的妥当性(concurrent validity)を考える。尚、Pearsonの積率相関係数の結果は「表2」

MCQ-30因子	矢田部ギルフォード性格検査の特性因子											BDI 得点	
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A		S
認知的自信の欠如	**	**	**	**	**	**		(**)			(**)	(**)	**
心配事への積極的信念										(**)			
認知的自己意識(メタ認知)	**	*	*	**		*		(**)		(**)			
制御不能と危険(消極的信念)	**	**	**	**	**	**		(**)		(**)	(*)	(*)	**
思考制御欲求(消極的信念)	**	**	**	**	**	**		(**)		(**)	(*)	(**)	**
BDI	**	**	**	**	**	**		(**)		(**)	(**)	(**)	-

ただし、** = $p < .01$, * = $p < .05$, ()は負の相関

D: 抑うつ性, C: 気分変化, I: 劣等感, N: 神経質, O: 主観的, Co: 非協動的,
Ag: 攻撃的, G: 活動的, R: のんき, T: 思考的外向, A: 支配性, S: 社会的外向

の通りである。

原著者による MCQ-30 での 5 つの因子の命名と項目内容や説明内容 (Cartwright-Hatton & Wells, 1997, p.283-284) では、測定内容や構成概念は、次の通りである。

「**認知的自信の欠如 (lack of cognitive confidence)**」とは、「**記憶や注意力などの認知的な自信の欠如 (lack of confidence in one's own memory and attention capabilities)**」に関する項目からなる。

「**積極的信念**」とは、「**心配事への積極的信念 (positive beliefs about worry)**」であり、心配することが計画立案や問題解決に役立ち、望ましい性格特徴として、心配することが適切とする項目からなる。

「**認知的自己意識 (cognitive self-consciousness)**」とは、「**メタ認知過程 (metacognitive process)**」でもあり、自分自身の思考過程を先ず大事にすることを反映している。

「**制御不能と危険**」とは、「**思考制御やそれに伴う危険に対する消極的信念 (negative beliefs about the controllability of thoughts and corresponding danger)**」の意味があり、心配機能と安全保持のために制御されなければならぬとする信念と心配事を制御不能とする信念である。

「**思考制御欲求**」とは、「**迷信・罰・責任など思考一般についての消極的信念 (negative beliefs about thoughts in general, including themes of superstition, punishment and responsibility)**」のことで、有害な結果を防ぐために、迷信や罰や責任などの思考制御が必要とする

1) MCQ-30 尺度相互の相関

MCQ-30 項目平均値の尺度の合計により、尺度相互の積率相関係数を算出したところ、有意 ($p < .01$ 、以下特記しない限りは同様) だったのは、「認知的自己意識」と「積極的信念」($r = .605$)、「思考制御欲求」と「制御不能と危険」($r = .608$)、「制御不能と危険」と「認知的自己意識」($r = .449$)、「思考制御欲求」と「認知的自己意識」($r = .454$)、「制御不能と危険」と「認知的自信の欠如」($r = .398$)、「思考的制御」と「認知的自信の欠如」($r = .384$)、「制御不能と危険」と「積極的信念」($r = .315$)、「思考制御欲求」と「積極的信念」($r = .286$)で、正の相関であった。「積極的信念」と「認知的自信の欠如」では負の相関 ($r = -.028$)、「認知的自己意識」と「認知的自信の欠如」では正の相関 ($r = .158$)で有意ではなかった。

以上から、メタ認知が可能な人は心配事を積極的に考えることができる人もいれば、他方で消極的信念に陥る人もいるといえる。認知的自信の欠如が消極的信念に関わっていることがわかる。

2) MCQ-30 と Y-G 性格検査との関係

因子分析では、第1因子は、因子負荷が0.4以上で、大きい方から(以下、同様)、抑うつ性大、気分の変化大、劣等感大、神経質、主観的、非協調的、「制御不能と危険」など「抑うつ性」と思われる。第2因子は、のんき、攻撃的、社会的外向、支配性大、活動的など Y-G 性格検査の尺度による「社会的外向」と思われる。第3因子が「積極的信念」、「認知的自己意識」、「思考的制御欲求」、思考的内向(熟慮的)などによる「自己モニターの積極的活用」と思われる。第4因子が「認知的自信の欠如」、「思考的制御欲求」の「自信欠如の逃避」と思われる。

次に相関係数でみると、

「**認知的自信の欠如**」と Y-G の特性因子は、劣等感、非活動的、主観的、気分変化大、神経質、服従的、社会的内向、抑うつ的と有意な相関。

「**積極的信念**」と Y-G の特性因子は、思考的内向とだけ有意な相関

「**認知的自己意識**」は、相関係数が大きい順に(以下、同様)、思考的内向、神経質、抑うつ、気分変化大、非協調的、劣等感との間で有意な相関があった。

「**制御不能と危険**」と Y-G の特性因子は、神経質、抑うつ的、劣等感、気分の変化大、非協調的、主観的、思考的内向、非活動的、服従的、社会的内向と有意な相関

「**思考制御欲求**」と Y-G の特性因子は、抑うつ的、神経質、劣等感、主観的、非協調的、気分変化大、思考的内向、服従的、非活動的。

田崎・諫早(2007)および田崎(2012)に対して、今回の結果は、これらと矛盾することなく、同一の傾向がみられたことになる。

以上から、MCQ-30 の尺度の中で、「認知的自信の欠如」、「制御不能と危険」そして「思考制御欲求」は、Y-G 性格検査のプロフィール判定の E 型(eccentric type)「左下がり型」(不安定不適應消極型)の性格特徴に類似したタイプに鋭敏な指標かもしれない。また、「積極的信念」と「認知的自己意識」は思考的内向の意味合いが強いことが明らかとなった。とりわけ「積極的信念」は思考的内向(思索的傾向、内省力、熟慮性)などの測定内容に近似し、構成概念に近似した内容と考えられる。

3) MCQ-30 と BDI との関係

因子分析の結果、BDI、「認知的自信の欠如」、「思考制御欲求」そして「制御不能と危険」の群による E 型(不安定不適應型消極型性)と、「積極的信念」と「認知的自己意識」による思考的内向の2つの因子が見られた。上掲「2)」と類似した概念や分類の結果となっている。

BDI との積率相関係数でも、他の4尺度とは、有意な正の相関が見出されたが、「積極的信念」や「認知的自己意識」との間では、相関係数は統計的

には有意とならなかった。

4) その他の質問紙 (Y-G 性格検査と BDI) 間の関係

因子分析の結果、第1因子は、抑うつ、神経質、思考的内向、非協調的、劣等感大、気分の変化大、BDI、主観的など、「抑うつ性」と命名可能な因子である。第2因子は、支配性大、社会的外向、活動的など、「支配性」と命名可能な因子と思われる。

BDI と Y-G 性格検査との積率相関係数で有意な正の相関がみられたのは、当然ながら、因子分析の第1因子に含まれる6尺度であり、負の有意な相関がみられたのは、思考的外向、社交的外向、支配性大、活動性である。BDI との相関が有意とならなかった Y-G 性格検査の特性因子は、のんき、攻撃的、の2つだった。

抑うつについて、先行研究(林, 1988)で、BDIについてY-Gの「抑うつ」とは $r = .62$ 、その他、「気分の変化大」、「劣等感」、「神経質」、「客観的」、「協調的」で正の相関($r = .42 \sim .53$)がみられたという。今回の結果でも、BDI と Y-G 性格検査の「抑うつ」との間で $r = .64$ となり、今回の相関係数の中では最も大きな相関係数となった。その他、「気分の変化大」($r = .38$)、「劣等感」($r = .55$)、「神経質」($r = .57$)、「客観的」($r = .50$)、「協調的」($r = .52$)と有意な正の相関係数が得られた。以上から、BDI と Y-G 性格検査との間での関係からみれば、過去の先行研究とほぼ同様の結果が得られたといえる。その他、質問紙記入の年齢(月齢に換算)との相関では、BDI ($r = .23, p < .01$)、「思考制御欲求」($r = .19, p < .05$)と正の相関で有意であった。学年が進み、3,4年生になると抑うつや自己制御欲求が強くなるようである。Y-G 性格検査の結果を個人的に知りたい調査参加者には封筒の通し番号を○で囲んでチェックを記すように伝えたが、105名のクラスで結果開示を希望したのは、男子32人中17人、女子73名中57名であり、 χ^2 検定の結果、有意な差があった($p < .01$)。男性に比べ、女性の方が自己を知りモニターしたいという気持ちが強いように思われる。他方、有効回答数126名中10名がBDIの値が重症の範囲(25以上)であったことが気になるが、通し番号は本人だけが知る番号なので今回は特定できない。

以上から、今回の結論として、MCQ-30における「認知的自信の欠如」、「制御不能と危険」、「思考制御欲求」の尺度は、ともにY-G性格検査のプロフィール判定のE型(eccentric type)「左下がり型」(不安定不適応消極型)の性格特徴に類似したタイプに鋭敏な指標となるだろう。さらに、これら3尺度間の差異を、今後も他の種々の性格検査や尺度との関係から明瞭にしていく必要があるだろう。また、「積極的信念」と「認知的自己意識」は思考的内向の意味合いが強いことが明らかとなった。今回、明瞭になったのは、「積極

的信念」がかなり限定的に思考的内向（思索的傾向、内省力、熟慮性）の構成概念として特定できることである。

今後の課題

南風原(2001)の「(g)尺度の表面的妥当性は？」とは「回答者や尺度の利用者にとって尺度が妥当に見える程度」「質問文の表現が稚拙だったり、作り方がいい加減に思えたりすると、そのことが回答態度に影響を与え、結果的に妥当性の低いデータを生む」(p.75)としている。今回のような原著が英文でその日本語翻訳版の作成に際しては、原著への忠実さと日本語への上手な翻訳作業が肝心である。今後も原著の精読のやり直しや原著に立ち戻り、よりMCQ-30の成り立ちや背景を詳細に把握し、可能ならば、原著者との意思の疎通を図りたい。

一般に、性格に関する心理検査は、投映法、質問紙法、精神作業検査法に分類される。今回は、質問紙の一部について相関関係をみた。他の質問紙、例えば原著者らが使用したSTAIなどとの関連も検討すべきである。また、投映法や精神作業検査法との関連も調べてみる必要があるだろう。

南風原(2001)が指摘するように、他の多種多様の尺度との関連による、例えば関連する尺度との収束的妥当性や、他の構成概念との相関が低くなっているかの弁別的妥当性など、いろいろな観点から構成概念妥当性の検討を重ねる必要があるだろう。

構成概念妥当性を考えるとき、MCQ-30のオリジナルのMCQそのものは不安症で来談した患者とのやり取りの記録内容から構成された質問項目であることを考慮すると、構成概念妥当性に必要な要素を含んでいるものと考えられる。それで十分かどうかを含めて、ワーディングの問題や今後も経験的な確認、他の尺度との関連など妥当性の向上に向けて、今後も努力が必要と思われる。MCQ-30を更に精選していくために、この領域専門の方からのご意見には心から傾聴しつつも改善していくつもりである。

日本経済新聞(2015年9月7日付「春秋」欄)にて、発明王のエジソンを挙げて、「電球の試作に1万個失敗しても、『うまくいかない方法を1万通り見つけただけだ』と気にしなかった。心理学と神経科学の専門家のエレヌ・フォックス氏は『脳科学は人格を変えられるか?』で、ポジティブ思考は関心の幅や興行きを広げ、創造性を高めると書いている。楽観的な脳がいくつもの発明を生んだとみる。...『人は生まれた瞬間から死ぬ瞬間まで、脳は絶えず何かに反応して変化する』」の文章が掲載された。このような信念をもてるのは一部の人たちだけであろう。積極的になりすぎても病気になる人もいる。抑うつ状態の人の中には、逆に内面に向かってしまう人もいる。また自分は健康だと思っている人間はどうか。MCQ-30は、こういったメタ

認知上の信念 (beliefs) を選択する際に現れる個人差を測定するものとされている。このテーマは奥が深いように思われる。

引用文献

- 上里一郎 (2001). 心理アセスメントハンドブック [第2版] (Handbook of Psychological Assessment. 2nd edition). 西村書店
- Cartwright-Hatton, S. & Wells, A. (1997). Beliefs about Worry and Intrusions: The Metacognitions Questionnaire and its Correlates. *Journal of Anxiety Disorders*, **11**, 279-296.
- 南風原朝和 (2001). 量的調査 - 尺度の作成と相関分析 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編). 心理学研究法入門 調査・実験から実践まで 東京大学出版会, pp.63-91.
- 林 潔 (1988). ベック抑うつ尺度 (BDI; Beck Depression Inventory). 堀 洋通・監修 心理測定尺度集 Ⅲ - 心の健康をはかる (適応・臨床) - サイエンス社 pp.140-146.
- Lilienfeld, S. O., Lynn, S.J., & Lohr, J. M. (Eds.) (2003). *Science and pseudoscience in clinical psychology*. New York: The Guilford Press. (「村井, 2012」による)
- 正田 亘 (2001). 危険と安全の心理学 (中災防新書) 中央労働災害防止協会
- 村井潤一郎 (2012). *Progress & Application 心理学研究法* サイエンス社
- 村上 隆 (1999). 「妥当性」中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹数男・立花政夫・箱田裕司・編集 心理学辞典 有斐閣, p.564.
- 大山 正・丸山康則 (2001). ヒューマンエラーの心理学 - 医療・交通・原子力事故はなぜ起こるのか - 麗澤大学出版会
- 田崎権一 (2012). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004)の信頼性の検討 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, p.519.
- 田崎権一 (2013). メタ認知質問紙 (metacognitions questionnaire: MCQ) の背景と短縮版 MCQ-30の意義 熊本県立大学大学院文学研究科論集, **6**, 17-35.
- 田崎権一 (2015). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) 日本語訳版の信頼性の検討 熊本県立大学文学部紀要, 第21巻 (通巻74巻), 15-24.
- 田崎権一・諫早正行 (2007). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) 日本語訳版作成の試み 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, p.500.
- Wells, A. & Cartwright-Hatton, S. (2004). A short form of the metacognitions questionnaire: properties of the MCQ-30. *Behavior Research and Therapy*, **42**, 385-396.
- Wells, A. & Matthews, G. (1994). *Attention and Emotion: A Clinical Perspective*. Lawrence Erlbaum Associates Ltd. (ウェルズ, A.・マシューズ, G. 箱田裕司・丹野義彦・津田彰 (監訳) (2002). 心理臨床の認知心理学—感情障害の認知モデル— 東京: 培風館)

付記

本研究では、これまで使用してきた MCQ-30 の質問項目のうち、本文「表 1」「Q8」質問項目で文章表現を一部修正したものを使用した。

調査対象者としてご協力いただいた皆さんに心からお礼を申し上げます。